法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-06-25

私的言語批判による独我論の貫徹および消去

TANIGUCHI, Chikara / 谷口, 力

(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
13
(開始ページ / Start Page)
161
(終了ページ / End Page)
175
(発行年 / Year)
2016-01-10
(URL)
https://doi.org/10.15002/00012482

Hosei University Repository

私的言語批判による独我論の貫徹および消去

谷　口　　力

はじめに

世界とはいかにあるかという『論理哲学論考』(1922 年，以下『論考』と略）でのウィトゲンシュタインの考察は，つまるところ「私の言語の限界が私の世界の限界を意味する」(TLP, 5.6）という命題に集約されると思われる。すなわち，言語を通した独我論の貫徹化によって「世界と生は一つになる」(TLP, 5.621）のであり，世界とは「世界」として対象化されるものではなく，自らが生き抜くものなのである。この，言語を通して世界が世界として成立するという観点は，ウィトゲンシュタインの生涯を通じて一貫して語られていた論点である。しかし『論考』において「生」として解読された「世界」は，『哲学探究』(1953 年，以下『探求』と略）においては，もはやそれを用いて「生」が成立するところの言語ゲームのことでしかない。つまり，『論考』での「私の言語」は，『探求』では，我々の言語ゲームに代行されてしまったことになる。ここに矛盾を見る人は，これを後期ウィトゲンシュタインの転向 ──『探求』の私的言語批判による『論考』の独我論の否定 ── だと断定するかもしれない。それに対し本稿は，むしろこれがウィトゲンシュタインの根本意図に準じた帰結であるという観点から，後期ウィトゲンシュタインの本意 ──『探求』の私的言語批判による『論考』の独我論の貫徹 ── を捉えようとするものである。

ウィトゲンシュタインの哲学の最も深い動機に独我論の問題があったことは，その諸著作を読む限り疑いない点である。ただしウィトゲンシュタインは独我論を主張しようとしたのではない。むしろその誘いを解くため，それを主張しえない議論として消去しようとしたのである。すなわち，いわゆる認識論的な

Hosei University Repository

「独我論」の誤りとは，その不徹底さにこそあり，「独我論が意味している（*meint*）ことは全く正しい」（TLP, 5.62）が，その正しさは「厳格に貫徹されて」（TLP, 5.64）こそ正しく，そして貫徹されてしまえば（その外からそれを分析するのは不可能なので）その正しさは論理的に語りえなくなる，そういう議論である。それゆえ，独我論の問題とは，それが中途半端に主張された場合に生じるのであり，むしろそれを貫徹することによってあらゆる端を消去したなら，それは「純粋な実在論と一致する」（ibid.）のである。ここで重要な点は，いわゆる「実在論」には絶えず「独我論」が主張されうる余地が残るが，独我論を貫徹した果てにそれが実在論と一致した場合には，そしてその場合のみ，主張しうるような「独我論」は消去するということである。

この意味で，『探求』において「私的言語」なる考えが出されたのは必然である。私的言語はあるかと繰り返し問われ，そのたび否定的帰結が導かれる。一般にはこの議論が，私的言語がないことの証明だと解されている。しかしいかなる意味でそうであるかを理解しなければ，その結論は単に言語の公共性といった意味しか持ちえないだろう。なぜ私的言語は批判されねばならないのか。多くの解釈はウィトゲンシュタインの前期と後期を異なる思想と見なすため，この論点を逸しているか，少なくとも明瞭に見定められていないように思われる。その段階では，なお「実在論」と「独我論」の混在があるのである。そうではなく，独我論の貫徹は，同時に私的言語をも貫徹しているのでなくてはならないのである。かくして以下，まず従来の諸解釈を概観し，問題点を述べた上で（1–2），改めてウィトゲンシュタインの本意を探り（3），最後に，本稿での見解を提出する（4）。

1. 私的言語否定論と肯定論

ウィトゲンシュタインが想定する「私的言語」を捉える際，これを私自身が発する言語なのだから他人の言語とは根本的に異なるという意味で私的である，と考えるのは確かに誤りであり（というのも，そう考えればそれが私的であるのは疑いないことだから），そもそも「私的言語」が批判されるのは，それが公的言語と同じ規準と規則で存在しえないことを示すためである。こう解せば，言語規則に従う言語の公共性は固く守られ，「私的言語」なる特殊な言語だけがただ否定される訳である。しかし一方で，「私的言語」と呼ばれる言語もま

Hosei University Repository

た，言語規則に従う言語なのではないか。もしそうなら，どうしてその発話者は，自分の私的言語を（言語規則に従っていないという理由で）否定できるのか。

この点，S. A. クリプキは，そもそも言語の「規則」の適用を「暗闇における正当化されないひと突き」とし，「盲目的」（Kripke 1982, 17）とする。だがもしそうなら，人が言葉で何かを意味することはありえなくなる。それゆえクリプキは当の問題を，いかに私的言語が不可能かを示しうるかではなく，いかに何らかの言語が可能かを示しうるかという問題に置き換え（cf. ibid., 62），その「懐疑的解決」として，個人が孤立している場合，その個人がそもそも何かを意味しているとは言えないという帰結に至る（cf. ibid., 68–69）。つまり，公的言語が規準になるということだけが私的言語否定の論拠となる。確かに，その結論は間違っていないと思われる。しかしもしそれだけのことなら，そこには言語の公共性と「規則」の神秘性といった哲学的には瑣末な帰結しかもたらさないように見える（クリプキは上記のパラドクスこそウィトゲンシュタインの哲学的功績だとするが）。というのも，規則に従うことをクリプキは「導かれている（*guided*）」（ibid., 17）と表現するが，N. マルカムも批判した通り[1]，我々は日常生活において自分が導かれているとは考えないからであり，むしろ「規則に従うことは一つの実践である」（PI, 202）からである。「実践」とは，自らが実践するのである。それゆえ，公的な「規則」に我々が「導かれている」という道筋は，我々の実際的な「生」の在り方にはそぐわないと思われる。

これに対し，A. J. エイヤーはむしろ「私が頼れるのは自分の記憶と現在の感覚だけ」（Ayer 1985, 76）だと言う。なぜなら，「もし人が自分の視力を自分の記憶と同様に疑うなら他人に相談できる。しかしその場合，彼は他人の返答を理解しなければならず，他人が作る記号を正しく同定する必要がある」（ibid.）からである。つまり，私的言語における私的感覚の認識が信用できないなら，別の私的感覚の認識もまた信用できないはずだという訳である。それゆえエイヤーは，「ウィトゲンシュタインの私的言語批判は全面的に失敗している」（ibid., 86）と述べる。しかしこうした手続きの間，エイヤーがそれに依存し存在すると主張する私的な言語とは，実は（何ら私的ではない）公的言語ではないか。たとえば，他人の記号 p を「正しく同定する」ための「自分の記憶と現在の感覚」とは，p と対照可能であるところの公的言語であろう。

Hosei University Repository

するとここでは結局，「私的言語」の問題には一歩も踏み込んでいないことにならないか。

他方，「私的言語」自体をむしろ肯定的に捉える見解もある。たとえば永井均は，『探求』258 節のいわゆる感覚日記から，なおその可能性を見る。258 節はこう始まる。

> ある種の感覚が繰り返し起こることを私は日記につけたい。そのため私はその感覚に「E」という記号を結びつけ，私がその感覚を持ったあらゆる日にこの記号をカレンダーに書く。── （PI, 258）

この「E」を永井はこう仮定する。たとえば「0, 2, 4, 6, …」という数字を見て，100 以降に「100, 104, 108」と書く生徒がいても，彼が従う規則を「100 までは 2，200 までは 4…」と語りうるなら，彼と我々の間には規則の不一致はあっても規則の従い方の不一致はないことになる。だが，それさえもない生徒の場合にはそうはならない。つまり，「E」が他人に理解される可能性はあるが，その場合は理解されうる規則を踏まえておらねばならず，そうした理解されうる規則以外の規則に従っているようなものはそもそも理解されえないのである。だから「その意味で」，そうした私的規則の一例としての「私的言語」は「どこまでも可能」とされ（cf. 永井 1995a, 176-180），また，「言語ゲームという隠蔽装置の下には，なお独我論の香りが立ちこめている」（永井 1995b, 220）と言われる。しかし，理解されうる規則に従っていない言語とは，結局，どこにも成立しえない ── したがって，どこにも存在しない ── 言語ということになりはしないか。つまり，理解されうる規則以外の規則という意味での規則への違う従い方など，そもそも問題にならないのではないか。しかしもしそうなら，なぜ 258 節の「私」は，実際，「E」を「私的言語」と一度ならずとも呼ぼうとしたのか。

一方，入不二基義は，より端的にこう述べる。すなわち，そもそも「E」は我々の言語から解き放たれておらず感覚の文法に従っているのだから，258 節によっては私的言語批判はうまくいかないとするのである（cf. 入不二 2006, 109-113）。確かに，「E」に意味を与えようとした途端，どこまでいってもそれは私的言語へは到達しない。だが，それはただ「どこまでたどっても言い当てられない」にすぎず，むしろ「問題」であることが終わらず，「肯定も否定

Hosei University Repository

もできないまま言語ゲームに潜行伴走し続ける」と（cf. ibid., 116–119）。しかし，もし言語ゲームに潜行するなら，それはすでに（あるいはやがて）当の言語になっているものではないか。あるいはもし本当に「言い当てられない」なら，やはりそれは問題にならないのではないか。

2. 私的言語両義論

近年では，否定や肯定という一意的解釈を採らない議論も提出されている。たとえば J. L. ブランドゥルは，私的言語議論の意図とは，「いずれの言い立てられた証明をも掘り崩すこと」であり，どの主張も独断論として疑うことだったと述べている（Brandl 1995, 16）。しかし，何であれ言い立てられる主張を掘り崩すということだけによっては，『探求』が求める「ハエにハエ捕り瓶からの出口を示してやること」（PI, 309）は決して果たされないことだろう。なぜなら，そこにはなお何かが言い立てられうる可能性が残り続けるからである。

反対に，G. ベイカーは，むしろ否定論も肯定論も共に保存しようとする。ベイカーは，ウィトゲンシュタインが「何か捉え難く重要なものとして私的言語の仮説を提供している」という多くの研究者が共有する解釈を疑い，『探求』の「いくらかのスケッチ」は「彼のテキストを改善するための，読者への開かれた誘いではないか」（Baker 1998, 87）と問う。そしてウィトゲンシュタインが教説の形式を避け，事例によって論証を進める点から，この議論が「『私的』言語の仮説の，ある決定的な還元を狙っているという考えにそもそも同意していない」（ibid., 93）と述べ，この議論をある還元として見るどの人も，『探求』中の対話者をある敵，あるいはデカルト的な心の見方の代弁者として扱いがちなことを批判し，むしろウィトゲンシュタインは行動主義に反論していることから，「反デカルト主義」というレッテルは誤りだと言う（cf. ibid., 98–99）。しかしもしそうなら，なぜウィトゲンシュタインは「私的言語」という問題をあえて選び，それが後期哲学の重要な位置を占めているのか。上述の見方では，なぜこの主題にウィトゲンシュタイン自身が苦しみ，格闘したのかという背景が不明瞭になると思われる。確かに，『探求』が不完全なスケッチの集まりであることはその序文でも認められており，また，反行動主義的な記述（cf. PI, 307–308）があるのも事実である。しかしウィトゲンシュタインは『青色本』（1933–34 年）の中ですでに，デカルト的「我」を文法的錯覚からく

Hosei University Repository

る「幻想（illusion）」（BB, 69）と示唆しているのだから，これをデカルト主義の保存と見なすのは妥当ではないだろう[2]。

また，テキスト自体の読み換えを試みる S. マルホールの案もある。マルホールは，いわゆる私的言語議論が始まる箇所とされる 243 節の二段落目について，その両義的効果こそその著者の意図だったというこれまでにない逆の発想をする。以下がその箇所である。

> しかし我々はまた，ある人が自分の使用のためにその内的体験 ── 彼の感情，気分など ── を書きつけたり表現したりできる一つの言語を考えることはできるだろうか？ ── ── 我々は我々の日常言語において一体そうすることができないだろうか？ ── しかしそういうことは私の意味している（meint）ことではない。こうした言語の諸々の語は，話している当人だけが知りうるものに，つまり彼の直接的で私的な諸感覚に関係する（beziehen）ものでなくてはならない。したがって，他人はこうした言語を理解することはできない。（PI, 243）

マルホールは，ここには二つの読み方があると言う。第一には，当の言語はその発話者の直接的で私的な諸感覚を指し示し，その意味は発話者にのみ知られうると解す読み方，第二には，初めの問いの後のダブルダッシュ（── ──）を，「これまで言われてきたことを熟考する時間を要すかのような珍しく長い区切り」と見立て，後続の文で当の言語について本当に意味したかったことを説明していると解す読み方である（cf. Mulhall 2006, 17）。そして前者では，「語の無意味な結合より以上ではないことを示す」のに対し，後者では，「彼が探している満足を見出すための別の仕方を想像することを開き続ける」（ibid., 18–19）。マルホールは言う。「むしろ著者は両方の読み方を可能にするよう意図して」（ibid., 20）おり，我々に必要なのは，「それぞれ互いに閉じ籠もっているものとして，あるいはその間で我々が選ばねばならぬものとして固着したような，そうしたテキストの諸様相を主張したり提出したりしない読み方である」（ibid., 21）と。しかし，これではもちろん私的言語議論の核心に触れられることはなく，問題の棚上げでしかない。なぜなら，度重なる論争を経ても，なおいずれとも確定づけられぬ謎があり，その結論に物足りなさが残るなら，こうした両義的解釈の背後にはなお，「私的言語」に対する懐疑が潜んでいる

Hosei University Repository

からである。言わば，それは中途半端な「独我論」を世界の中に置き去りにしてしまうのである。

3. 正当化なき「独我論」と「私的言語」

確かに我々は，直観的に自分の私的言語を肯定したい誘惑に駆られる[3]。しかしこの直観は，どうしてもその最後に論証に支えられぬ飛躍が帰結されるのが特徴である。それはおそらく公的言語とは全く別な言語を想定するからであり，そのため，否定論を解消する効果を持ちえないのである。問題は，この誘惑は何に起因するのか，という点である。ここで，ウィトゲンシュタインの議論の核心を改めて捉えてみよう。独我論の問題が私的言語の着想に移行し始めるのは『青色本』からである。そこで『青色本』の次の言葉が，ウィトゲンシュタインのもともとの独我論的傾向を示すことをまず確認しよう。

> 私にとって私自身の経験だけが実在的（real）だと言いたい誘惑がある。「私は，私が見る，聞く，痛みを感じるなどのことは知っているが，他のどの人もそうすることは知らない。私はこれを知りえない。なぜなら，私は私であり，彼らは彼らであるから。」／〔…〕こう反問される。「もしあなたが，誰かが痛みを持っていることに同情するなら，あなたは確かに少なくとも彼が痛みを持つことを信じていなければならない。」しかし，いかにして私はこれを信じることさえできるのか？〔…〕／〔…〕言うまでもないが，我々はこうした困難を日常生活では感じない。〔…〕どういうものか，我々がある仕方で我々の経験を見るとき，我々の表現はもつれがちになる。我々には，あたかも我々が我々のジグソーパズルをまとめるために間違ったピースを持っているか，あるいはそれらが十分でないかのいずれかのように思われる。しかしそれらは全てそこにある。ただ全てがごっちゃになっている（mixed up）だけなのだ。（BB, 46）

そこで，「我々が為すべき全ては，それらを注意深く眺め，配列することだ」（ibid.）と言われる。というのも，「我々は我々の表現の仕方によって引き起こされたトラブルに直面している」（BB, 48）からである。つまり，ウィトゲンシュタインがこれから行なう試みとは，独我論的主張の誘惑を，その主張が

Hosei University Repository

成り立たないことの証明によって引っ込めることだと言っているのである。それは主張自体の誤りを是正することではなく，主張されることの誤りを確認することである。これを，（ここできっとウィトゲンシュタインが方向転換して）『論考』の独我論を否定しようとしているのだ，と受けとるのは誤読でなければならない。なぜなら，貫徹された独我論こそ『論考』の独我論であるのに対し，人が「独我論」を主張したくなるのは，それが貫徹されていないからこそだからである。よって，まさにウィトゲンシュタインは『論考』の帰結に準じ，その中途半端な「独我論」を消去しようとしているのである。その手がかりとなるのが，まず「規準」である。

> 「私の痛みだけが実在的だ」と言う人は，痛みを持つと言った他人たちが騙しているということを，公的規準（common criteria）── すなわち，我々の言葉にその公的意味を与える規準 ── によって彼が発見したと言おうと意味している（mean）のではない。むしろ彼が反感を持つことは，こうした規準に関わってこの表現を使うことである。（BB, 57）

「規準」とは，言語を言語として成立させる外的根拠のことである。つまり，独我論者の独我論的発言には，普通の日常言語とは同じ規準ではない語り方がある，という注目がここにはある。そして発話者自身の，その発話行為が従っている，言わば，内的根拠であるのが「規則」である。『探求』の議論に移ろう。

> 〈規則に従うこと〉は一つの実践である。そして規則に従うことを信じることは，規則に従うことではない。それゆえ，人は規則に〈私的に〉従うことはできない。なぜなら，さもなければ，規則に従うことを信じることが，規則に従うことと同じになってしまうだろうから。（PI, 202）

「規準」に適い，「規則」に従っていることこそ発話行為の本質であるなら，そもそも我々は ── それがどんな言語であれ ──「規準」や「規則」に外れては話しえないことになる。

かくして，公的言語とは全く別な言語をつくることは，言語の本質たるべき「規準」と「規則」を踏まえ損なっているという時点で不可能である。「E」が，

Hosei University Repository

感覚とか何かとか，ともかくそういった言葉でしか理解しえぬものであったように。そしてこの論点は，私的な感覚のみに基づくその感覚の当たり前の正しさは公的な媒介なしに正当化することができない，という注目へと至る。ウィトゲンシュタインによれば，たとえば列車の発車時刻を確認する際，〈自分の記憶の正しさに頼ること〉と〈時刻表を参照すること〉とは違うのであり，前者ではその正しさは証明できない（cf. PI, 265）。確かに，時刻表の参照もその確認の根拠は自分に帰される訳だから，（エイヤーが言うように）その正しさの根拠は同じかもしれない。しかしここで意味されているのは，正当化の根拠が，私的でなく公的なものだということである。これは私的感覚が正しくないということではない。むしろそれが正しいことは自明なことなので正当化することができない，むしろ正当化できないのでなくてはならない，ということである。そうであれば，こうした私的感覚に準じる私的言語が，公的言語とは完全に別なものでなくてはならないという理論はそこにないはずである。

> ある語を正当化（Rechtfertigung）なしに用いることは，それを不当（Unrecht）に用いるということではない。（PI, 289）

よって，ただ自分の私的感覚に準じて語られている言語こそ，そもそも公的言語の存在など関係なしに，なお正当化なき「私的言語」としての可能性を持ちうるだろう。

4. 主観言語 ── 独我論の貫徹および消去

この正当化のありえなさという論点は，本稿の 1–2 節で挙げた諸議論とは逆方向の光を当てるだろう。というのも，本稿は従来の議論が省いていた自明の事柄であるところのこと，すなわち，1 節冒頭に言及した「私自身が発する言語なのだから他人の言語とは根本的に異なるという意味」での私的な感覚をむしろ無視してはならない現象だと考えるからである。なぜなら，そもそもウィトゲンシュタインは先述した 243 節でこう言っていたからである。

> ── しかしそういうことは私の意味している（meint）ことではない。

Hosei University Repository

この「しかし」は，まさにこれから「私的言語」を主張しようとするその最初の反撃の箇所であるが，これこそまさに自分の私的感覚に準じた発言ではなかったか。つまり，「私的言語」という考えが出されるその根本動機とは，ここで言われていた「彼の直接的で私的な諸感覚に関係する」（PI, 243）言語を意味することだったのである。そうであるなら，正当化のありえなさとは，「私的な諸感覚に関係する」ものだろう。そしてそれはもはや否定すべきものでもないだろう。確かに，「E」のような感覚を自分にしか理解できない文法で表すことはできないかもしれない。もしそこに私的言語の不可能性が示されているなら，その根拠は，言語が公的であることを免れえない点にある。つまり，言語が私的であることを証明する術がないという点にある。とはいえ，証明する術がないことは，直ちにその事柄の偽を示すものではない。なぜなら，私的言語が不可避的に公的な見かけをまといながら，人はその言語をなお自分にしか理解しえぬ意味で用いているかもしれないからである。ここに，ウィトゲンシュタインが 1934 年から 1936 年頃に書いたメモ書きがある。

> 誰かが絶えず主観的に嘘をついているが客観的にはそうでない場合を人は想像しうる。
>
> 〔…〕誰かがある特有の嘘のつき方をしていて，彼はつねに赤を「緑」と，緑を「赤」と呼びながら嘘をつくが，実際のところ，彼が言うことは他の人々の慣用と一致するので，彼が嘘をついていることは決して気づかれない。（PO, 248）

世間では「赤」と呼ばれている色を，ある人が主観的に「緑」と呼んでいた場合，彼がその当の色をした事物の色について他人に嘘を教えようとして「赤」と伝えても，他人は彼が嘘をついたことには気づかない。実際，こうしたことは論理的にありうるだろう。『青色本』には，次のような一節があった。

> 本質的であるのは，私がこのことを言うところの誰もが，私を理解できてはならないことである。本質的であるのは，「私が本当に意味している（*mean*）こと」を他人が理解できてはならないことである。（BB, 65）

Hosei University Repository

この箇所は，（訳の判らぬ語について言っているのではなく）私は「私」という語で「L. W.〔Lutwig Wittgenstein〕」を意味していないが，他人は「私」を「L. W.」の意味と理解してくれてよいと言っている文脈にある。つまりここには，公的言語（「L. W.」）に，私的なもの（「私」）が意味されてしまうことの不可避性が示されている。が，「それでよい（it will do）」（BB, 64）のである。明らかであるのは，我々の日常言語には，主観的意味内容をすでにそこに含み込んでいるような語がある，ということである。なるほど私的な規則に従う言語などないのだから，言語規則とは，ただ一つの公的な規則であるしかない。ところがその言語規則が，主観的に従われているとしたらどうか。言語を用いて何らかの価値をつくりあげるというより，むしろ発話するその瞬間からすでに言語は価値づいているのである。

こうした主観言語の示唆は，言語のうち，いくらかが主観的でその他はそうではない，ということにはならない。むしろこの事実は，言語そのものが全的に主観的であることを証明するのである。なぜなら，我々が何であれ有意味に言語を話すとき，部分的には主観的に，その他はそうでない形で話す，ということにはなっていないからである。かくして，私的感覚に準じた言葉が公的言語でしか話せないというその見かけの矛盾は，我々がそもそも主観言語しか話せないという言語そのものの構造に起因していたことが判る。事実，ウィトゲンシュタインは，「人がある語を〈理解していると信じて〉いて，ある意味をその語に結びつけているが，しかし正しく（richtige）はない場合の規準」についてこう書いていた。

> 〔この場合，〕人は主観的な理解（Subjektiven Verstehen）について語ることができよう。そして他人は理解しないが，しかし私は〈理解しているように見える〉音声を，人は「私的言語」と呼ぶことができよう。（PI, 269）

これが「私的言語」の定義なら，そもそも我々はそれを使っていることになる[(4)]。我々は「公的言語」を選び出して使う訳ではない。つまり，ある思考があって，その思考を表現するために公的な言語をあてがっている訳ではないはずである。とはいえ，こうした私的言語一元論は，再び（それのみを私が理解するところの）「言語」として書き換えられねばならない。というのも，私的

Hosei University Repository

言語が「言語」として公共化しえていることは，論理的には偶然でも，歴史的には必然であり，それは「教えられた」[5] と言えるからである。それゆえ，もし「私的言語」なる言語が独立に存在するなら，それは私の「生」から切り離されたものであることだろう。問題は，それが「私的言語」と呼ばれることの正当化の無意味さだったのである。

かくして，「私の言語」は，つまるところ，それが唯一の言語であるところの日常言語に集約される。なぜ私的言語は批判されねばならなかったのか。日常言語こそ私の言語であることを全的に肯定するためには，（公的言語と対称的な）「私的言語」なるものの可能性を逆に完全に消し去ってしまわねばならなかったのである。ここにこそ「独我論が厳格に貫徹されてしまえば（der Solipsismus, streng durchgeführt）」（TLP, 5.64）[6] と言われたことの重大な意味がある。つまり，独我論は何としても一旦貫徹されねばならなかったのであり，これをたとえば単に，「独我論」という「混乱」した「一時的主張」（McManus 2006, 115）としてのみ解すのではあまりに皮相的である。注意すべきことは，独我論が意味していること自体が混乱であるのではなく，「独我論」を主張しようとすることが混乱である，ということの明確な区別である。なぜなら，前者はそもそも「全く正しい」（TLP, 5.62）のであるから。かくして，「私的言語」を認めまいとするウィトゲンシュタインの試みは，独我論を貫徹せんとすることと直接的に対応しているのである。そうであれば，前―後期ウィトゲンシュタインは，ある意味では全く同一のことを別の形で示そうとしていただけということになる[7]。

さて，疑惑は晴れたか。今こそウィトゲンシュタインの次の言葉を理解しよう。

> 空の青さを眺めよ。そして自身に対し『何て青い空だろう！』と言ってみよ。── あなたがそれを思わずしているとき ── 哲学的意図など伴わず ──，この色彩印象があなただけに属しているとはあなたの念頭には浮かんでこない。そしてあなたはこの叫びを他人に向けることに何の配慮もしない。〔…〕私が言いたいのは，人が〈私的言語〉について思い巡らしているときの〈感覚の命名〉にしばしばつきものの，あなた‐自身‐内‐指し示しという感覚を，あなたが持っていないということである。（PI, 275）

Hosei University Repository

世界はまるごと「私」のものであり，世界が「私」に属しているかどうか疑うこともありえない。このとき，「世界」と「生」は一つである（cf. TLP, 5.621）。帰属化されるべきものはこれから帰属化すべきものでなければならないのと同様，正当化されるべきことはこれから正当化すべきことであるはずである。独我論はそもそも正当化する必要がなかった，のである。

本稿 1-2 節で挙げた従来の諸解釈の難点は，第一に，『探求』を前期ウィトゲンシュタインとは全く異なる議論として語らざるをえなくさせる点，第二に，ウィトゲンシュタインが「哲学の目的」だと公言していた，問題の解明や消去（cf. TLP, 4.112; PI, 309）が与えられないという点である。しかし，本稿の論点を踏まえるなら，「独我論」の問題も「私的言語」の問題も，同時に，問題それ自体が解消するという仕方で消去するはずである。

> 「人が思う（meint）ときはその人自身が思うのだ。」 かくして，人は自分自身で動いている。人は自分で前方へ突進し，それゆえ，その突進を同時に観察することはできない。確かにできない。（PI, 456）

真に一つであるものは，まさにそれが一つであるがゆえ，遂に一つであるということが言えなくなる。明晰な，『パルメニデス』式の論理である[(8)]。そこでは，外的「規準」とされていたものが私の世界の内側になる。そしてそこでは，導かれねばならない「規則」などない。生きることこそ規則の実践なのだから。ウィトゲンシュタインの独我論は否定されたのではなく，貫徹されたのである。それは振り返ることができないということ，すなわち，私の世界の中から消去する，ということである[(9)]。

＊本論文は，日本哲学会第 70 回大会（於：東京大学）での研究発表原稿を加筆修正したものである。

＊ウィトゲンシュタインの各著作の略号は下記に従い，引用文の後の括弧内の数字は，それぞれ命題番号，頁数，頁数，節番号を記している。

TLP　*Tractatus Logico-Philosophicus*. Oxford: Routledge & Kegan Paul, 1922.

PO　*Philosophical Occasions 1912–1951*. Klagge, J. C. & Nordmann, A. (eds), Indianapolis: Hackett, 1993.

BB　*The Blue and Brown Books*. Oxford: Blackwell, 1958. 2nd edition, 1969.

PI　*Philosophical Investigations: The German Text, with a Revised English Translation*. Oxford: Blackwell, 1953. 3rd edition, 2001.

Hosei University Repository

《注》

（1） Cf. Malcolm 1986, Chapter 9. とはいえ，マルカムは，クリプキの「社会的」解釈，すなわち，公的規準を私的言語批判の根拠に置くという論点には同意する（cf. ibid., 171）。

（2） むしろウィトゲンシュタインが抗うのは，デカルト主義であれ行動主義であれ，心的事柄をある「対象（object）」として考えようとする見方である（cf. Overgaard, 2007, 24–26）。

（3） 単純な私的言語否定論に少なからず我々日本人が反感を持つ傾向は，日本語がそもそも空主語言語（null-subject language）であることに密接に対応していると思われる。我々が主語なしで意見や感情を語るとき，それは省略ではなく，世界の中に自己を置いていないからである。むしろ自己はあまりに自明であり，その自明さが逆に文法的に対象化を免れた特殊な位置 ── すなわち，「世界の限界」（TLP, 5.632）── を独我論的主体として確保させる。しかし「世界の限界」は論理的に語りえないのだから，その私秘性を主張する段階では矛盾を抱えている。むしろ無主語の日本語とは，まさに独我論を貫徹し消去した言語である。

（4） 大森荘蔵はこう言う。「わたくしは他人の言葉を，わたくしが与えた意味において了解し，またそれ以外の了解の方法はない。そして，他人が同じ言葉にいかなる意味を与えているかを知らないし，またそれを知らないで了解しているのである。つまり，わたくしは日常言語を私的言語として使っており，またそれ以外の使い方はない」（大森 1971, 193）。

（5） 大森は言う。「日本語を憶え始めた時以来，他人（家族，教師，友人，書物の著者など）によって強制的にわたくしの私的言語を調整させられてきたのである。むしろ，わたくしは自分の私的言語を教えられた」と。しかし大森は，なお独我論的にこう述べる。「しかし，そのためにわたくしの私的言語が公共的になるとは決していえない」（大森 1971, 193）。

（6） “durchführen” には「連れて通る」「実行する」「成就する」「貫く」などの意味がある。つまりここでは，独我論が実行され貫かれたことが過去完了形で暗示されているのである。

（7） 『論考』の根本思想は，非対象的な事柄については語りえないことである。たとえば論理形式や主体や倫理は，「生」に付随する事柄としてのみ理解されうる。また，後期ウィトゲンシュタインにおける私的感覚や心的状態の考察も，実際的な生き方の表現としてのみ意味を持ちうる。それらは「エーテル的対象」ではなく（cf. BB, 47），言わば，生きている人間の前提である。

（8） Cf. Plato, *Parmenides*, 137C–138B, 141D–142A. ウィトゲンシュタインは，『パルメニデス』を「プラトンの諸著作のうち，最も深遠なもの」と発言している（cf. Drury 1999, 241）。

（9） 「独我論」という語は，『探求』の後，二度と現れなくなった。

Hosei University Repository

参照文献

Ayer, A. J. (1985) *Wittgenstein*. Chicago: The University of Chicago Press.(『ウィトゲンシュタイン』信原幸弘訳，みすず書房，1988 年。)

Baker, G. (1998) "The Private Language Argument"; in *Meaning and Mind: Wittgenstein and the Sciences of Mind*. Shanker, S. & Kilfoyle, D. (eds), London: Routledge, 2002. pp. 84–118.

Brandl, J. L. (1995) "Wittgenstein's Alleged Metaphysics of Mind"; in *Meaning and Mind: Wittgenstein and the Sciences of Mind*. Shanker, S. & Kilfoyle, D. (eds), London: Routledge, 2002, pp. 11–19.

Drury, M. O'C. (1999) "Conversations with Wittgenstein"; in *Portraits of Wittgenstein: vol. 3.* Flowers III, F. A. (ed.), Virginia: Thoemmes Press, 1999. pp. 188–252.

入不二基義（2006）『ウィトゲンシュタイン「私」は消去できるか』NHK 出版。

Kripke, S. A. (1982) *Wittgenstein on Rules and Private Language.* Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.(『ウィトゲンシュタインのパラドックス ── 規則・私的言語・他人の心 ──』黒崎宏訳，産業図書，1983 年。)

McManus, D. (2006) *The Enchantment of Words: Wittgenstein's Tractatus Logico-Philosophicus*. New York: Oxford University Press.

Malcolm, N. (1986) *Nothing is Hidden: Wittgenstein's Criticism of His Early Thought.* Oxford: Blackwell.(『何も隠されていない ── ウィトゲンシュタインの自己批判 ──』黒崎宏訳，産業図書，1991 年。)

Mulhall, S. (2007) *Wittgenstein's Private Language: Grammar, Nonsense, and Imagination in Philosophical Investigations,* §§*243–315*, New York: Oxford University Press.

永井均（1995a）『ウィトゲンシュタイン入門』ちくま新書。

――――（1995b）「独我論の問題」，『ウィトゲンシュタイン読本』飯田隆編，法政大学出版局，所収，206–221 頁。

大森荘蔵（1971）『言語・知覚・世界』岩波書店。

Overgaard, S. (2007) *Wittgenstein and Other Minds: Rethinking Subjectivity and Intersubjectivity with Wittgenstein, Levinas, and Husserl.* London: Routledge.

（哲学／市ヶ谷リベラルアーツセンター兼任講師）